

Communication Magazine Issue vol.65

alpen rose

ご自由にお持ち帰り下さい



A Trip of the Scents in Bern

香りと巡る美しきベルンの街

女子旅行一足

A STAR ALLIANCE MEMBER 

 **SWISS**

いつかまた、このホテルで

[Palazzo Salis]
パラッツォ・サリス

C O L U M N

そこに木があるから、気になる。

そこに気があるから、木になる。

セコイアの木に引かれる男が導かれて泊まることになったホテル。

文＝村瀬千文

友

人のひとりに「PLW」と呼ばれている男がいる。A proud Lone Wolf (誇り高き一匹のオオカミ)の略称である。さらに略してP、その孤高の男、オリーブ色がかった肌の色と顔つきからもしかして両親とは血のつながりがないのかと思っていたら、先住民族だった父方の先祖の隔世遺伝なんだそうで、生まれた孫の顔を見た祖父母が「おじいちゃんにそっくり」と言ったらしい。成長するにつれ、性格も「おじいちゃんにそっくり」になってきたそうで、見せてもらったアルバムには幼稚園の庭でひとりジャングルジムのてっぺんで草笛を吹きながら空を見上げている幼きPの姿があった。孤高、ただその二文字がテロップで流れるような写真だった。

さて、このPがめでたく結婚することになり、ジュネーブ駐在中の彼に友人たちで小さな旅をプレゼントすることになった。ホテル選びの重責はわたしに担うことになった。「ホテルありきで行き先を選んでくれ」という悪友たちの期待の視線が集まるなか、プレゼンテーションを行った。

Pという男、大都会より小さな村を好み、新しいものより古いものが好きで、特に脈々と長く続いているものが好き、人工的なものは嫌いで、花や木を愛し自然志向。そして、なぜか、ある木には格別強く引かれている……。

わたしが選んだホテルは「パラッツォ・サリス」。スイスの東の端っこ、グラウビュンデン地方のソーリオという小さな村にある、16室の小さなホテルで、もともとは1630年に地元の名門貴族バプティスタ・フォン・サリスが建てた邸宅だったところ。このサリス卿、騎士として名をはせたそうだが、今でもその末裔の一族がホテルを経営している。詩人のリルケもこのホテル

を愛したひとり。

さて、Pのためのホテル選びの決め手となったのは、庭の真ん中にある一本の大きな木、セコイアの木である。非常に堅牢で丈夫、長生きする木で、なかには2000年余りの時を生き延びてきたものもあるのだそう。

この木、Pが格別に愛する木でもある。Pの実家の庭にも大きな木があり、幼い頃からPの姿が見えないときは、この木を探せと言われていたそうだ。ブルックリンのボタニック・ガーデンに一緒に行ったときには、セコイアの盆栽のところで立ち止まり、「おまえももっと広い大地で生きたかったらう」と話しかけていた。セコイアという名が、チェロキー文字を作りチェロキー・インディアン¹の賢人として知られるセコイアにちなんだものであることは後で知った。

悪友仲間たちにプレゼンテーションをしたハイライトで、「そして、ここでPに新妻と一緒にランチを食べてもらいたいと思っています」とわたしが見せた写真は、世界各国から集めてきたと木々とともに、セコイアの大木がゆったりと茂るホテルの美しい庭。お天気が良い日にはガーデンレストランになるという。おおっ!とその場がどよめいたとき、満場一致で可決。

後日、Pから届いたお礼のメールには、「僕が大好きなもの、大切にしているものを分かってくれて、尊重してくれてありがとう。妻もとても喜んでいる。これはたぶん偶然だったんだろうと思うけれど、実は妻の好物は栗なんだよ!」

そうそう、このソーリオという町の名物は、栗。ヨーロッパ最大級の栗林があり、パンやパスタも栗粉で作ったものがあるほど。「おみやげはマロングラッセ!」とみんな返信した。



©Christian Speck

INFORMATION

Hotel Palazzo Salis

CH-7610 Soglio

Tel. +41 81 822 12 08

info@palazzo-salis.ch

www.palazzo-salis.ch

Chifumi Murase

ホテル愛好家のための

ホテル情報誌「ホテル・ジャンキーズ」編集長。

本欄の連載コラムをまとめた

「男がホテルに頼りたげるとき

The Perfect Hotel for Man.」。

ホテルブログ「hotel gadget」。